

所長あいさつ

長崎県教育センター所長 長谷川 哲朗

春に思う

風に舞い散る桜の花びらを掌で受け止め、「つかまえた」と歓声を上げる子どもがいる。春になると思い起こす句。

けふまでの日けふ捨ててはつ桜 千代女

咲き誇る桜の花は人の心を弾ませるが、一方でそれまでの日々をきっぱり打ち捨てよとやさしく諭しているようだ。春4月、学校が変わる、子どもたちが変わる。教師たちは思い新たに校門をくぐったことだろう。授業も学級づくりにも、子どもたちとの出会いにも同じことが繰り返されることはない。すべては初めてのことで、新しいことである。自信や余裕たっぷりの教師もあれば、悔いや反省の中から静かに心を決めている教師も多いに違いない。

子どもも同じである。澆刺として喜色満面の子どもあれば、思い悩みつつ新しい自分に期待する子もいるはずだ。一人一人が秘める微細な感情の在り処に思いを致す教師でありたい。指導が巧みだと評される教師がいる。そんな教師は、おそらくは同じ人間として、同じ人間だからこそわかる子どもの心や感情をその日の表情や素振りから汲み取り、つぶやかれる言葉から掬い上げているのだろう。教育が人間たる教師によって営まれるゆえんである。

この1年、子どもたちと紡ぎ出す物語はどういう展開を見せるだろうか。子どもたちの心の中に、「先生が好き」「先生は私のことをわかってくれる」「先生みたいな人になりたい」という信頼と憧憬が芽吹くことを信じたい。

「ひかりあふ二つの山の茂りかな」。詠んだのは向井去来、長崎の人。この句がどこで吟じられたかは知らないが、山々の重なる長崎の景のようでもある。みずみずしい若葉とまぶしい陽光のなか、子どもたちと教師たちがはちきれんばかりの笑顔でおしゃべりしている姿を思う。

